

# 教員養成学部における生活科教育

— 「小学校教科・生活」及び「生活科教育法」 —

## Teaching of Life Science as Faculty of Education in University

— “Life Science” and “Teaching Method of Primary Life Environment Studies”—

辻 泰秀\*・中村 琢\*\*・須山知香\*\*

TSUJI Yasuhide, NAKAMURA Taku and SUYAMA Chika

### 1. はじめに

教員養成学部では、小学校の各科目について、小学校教科専門と教科教育法（指導法）の二つの科目が位置付けられている。小学校教科専門では、教科で扱う教育内容について主に学ぶ。学生たちは小学校で学習したことを振り返るとともに、現在の教科のもとになる各学問分野の基礎について理解する機会になる。また、教科教育法では、学習指導要領・教材・学習指導案・授業展開など、教育現場での授業実践につながる内容について学ぶ。ただし、模擬授業など教育実践に直接関連する内容である場合があれば、教科の理念・歴史・発達論のように理論的な内容の場合もある。教員養成学部では、小学校教科専門を2年生、教科教育法を3年生において履修し、3年後期以降に教育実習を実施している場合が多く見受けられる。小学校教科専門と教科教育法（指導法）の二つの科目では、授業内容にそれぞれの特徴はあるが、別個に存在しているのではなく、相互に内容的な連携や体系性があることが望ましい。ここでは、岐阜大学教育学部における「小学校教科・生活」と「生活科教育法」の授業内容について報告することにする。

### 2. 「小学校教科・生活」と「生活科教育法」の運用

小学校の各教科については、教科のもとになる学問分野があり、教員養成学部の中に関連する講座・学科が設けられている。専門の分野に応じて学科目が設けられ、担当教員も所属している。ところが、生活科の場合には、教科としての歴史が浅いこと、小学校低学年のみに位置付けられていること、大学の教員数や予算が減少する中で新しく講座・学科を設置することが困難であったことから、中規模の教員養成学部では、他の教科及び分野を専門にする教員が兼担することで運用している<sup>1)</sup>。

岐阜大学教育学部では、理科教育や社会科教育を専門にする教員が中心となり、図画工作教育や家庭科教育の教員も加わることで、生活科の授業を運営してきた。1989年の学習指導要領の改訂において生活科が位置付けられた際に、低学年において理科と社会にかわって生活科が設置された。本来、理科と社会を統合して行う授業ではなく、別教科ではあるが、生活科の中に低学年における理科的及び社会的な内容が含まれている。そのため、理科や社会科の教員を中心に授業が実施されてきた。

生活科では、生活体験にもとづく学習をすることから、実技・実習を含む図画工作科や家庭科とも関連が深かった。また、教育方法やカリキュラム論を専門とする教員が、教科横断的、合科・総合的な学習に関心があり、生活科の研究にかかわるときもあった。

結果として、生活科教育を専門にする講座・学科を置かず、生活科委員会を設置して各教科の教員が兼担することで、現在にいたっている。近年、定年退職・転勤・役職との兼務等により、中心になる教員や各授業担当教員の交替が続いたので、改めて今後に向けて教員養成学部における生活科のあり方についての交流

\*岐阜大学教育学部美術教育講座

\*\*岐阜大学教育学部理科教育講座

の場が必要になっている。

大学では専門性を重視しがちな反面、教科間の連携が希薄になり、教科横断・総合的な見方ができないときがある。筆者（辻）は図画工作・美術科を専門としながら、生活科やカリキュラム論の授業の一部を担当してきたことで、小学校全般や子どもからの教科編成の視点をもつことができたように考える。

### 3. 生活科に関する授業カリキュラム

ここでは、平成29年度の授業担当及びシラバスについて示す。学年進行にともなってカリキュラムの改訂を行い、29年度には学部2年生において「小学校教科・生活」を加えることになった。従来までも「小学校教科・生活」を位置付けていたが、教員免許状取得のための必須科目ではなかった。そのため、1学年260名ほどのうち「小学校教科・生活」を履修する学生は、60～80名程にとどまっていた。小学校教員免許状を取得し、将来小学校で各教科を担当する中で、教員養成学部において履修や学習していない教科があることは、改善の余地があると考えた。全体の時間割や授業時間数との関係から、16コマ丸ごとではなく8コマにとどまるにしても、小学校教員免許状を取得する全学生が生活科を含めた全ての教科の専門科目を学習するように改めた。

#### 平成29年度 「小学校教科・生活」

平成27年度以前入学生（3年生）シラバス 前期 金曜日3限 旧課程・選択

- |                |               |
|----------------|---------------|
| 1. 須本（社会・現代社会） | オリエンテーション     |
| 2. 須本（社会・現代社会） | 体験から学ぶ生活科の気づき |
| 3. 須本（社会・現代社会） | 体験から学ぶ生活科の気づき |
| 4. 須本（社会・現代社会） | 体験から学ぶ生活科の気づき |
| 5. 非常勤・附属小教諭   | 指導の実際         |
| 6. 非常勤・附属小教諭   | 指導の実際         |
| 7. 非常勤・公立小教諭   | 指導の実際         |
| 8. 古屋（理科・生物）   | 栽培・飼育・理科遊びの実際 |
| 9. 中村（理科・物理）   | 栽培・飼育・理科遊びの実際 |
| 10. 中村（理科・物理）  | 栽培・飼育・理科遊びの実際 |
| 11. 須山（理科・生物）  | 栽培・飼育・理科遊びの実際 |
| 12. 須山（理科・生物）  | 栽培・飼育・理科遊びの実際 |
| 13. 辻（美術・図工）   | 生活科における造形体験活動 |
| 14. 内海（理科・化学）  | 栽培・飼育・理科遊びの実際 |
| 15. 内海（理科・化学）  | 栽培・飼育・理科遊びの実際 |

※平成29年度は第9～11回を中村と須山のTTで実施した。

平成28年度以降入学生（2年生）シラバス 前期 火曜日1・2限 新課程・必修

1回目を2クラス共通のオリエンテーション、2～8回、9～15回で各1クラスの授業を実施し、2年生全員（260名程）が8回の授業を受講する。

- |              |               |
|--------------|---------------|
| 1. 古屋（理科・生物） | オリエンテーション     |
| 2. 住浜（理科・物理） | 栽培・飼育・理科遊びの実際 |
| 3. 中村（理科・物理） | 栽培・飼育・理科遊びの実際 |
| 4. 須山（理科・生物） | 栽培・飼育・理科遊びの実際 |
| 5. 須山（理科・生物） | 栽培・飼育・理科遊びの実際 |
| 6. 内海（理科・化学） | 栽培・飼育・理科遊びの実際 |

- |                |               |
|----------------|---------------|
| 7. 内海 (理科・化学)  | 栽培・飼育・理科遊びの実際 |
| 8. 辻 (美術・図工)   | 生活科における造形体験活動 |
| 9. 中村 (理科・物理)  | 栽培・飼育・理科遊びの実際 |
| 10. 須山 (理科・生物) | 栽培・飼育・理科遊びの実際 |
| 11. 須山 (理科・生物) | 栽培・飼育・理科遊びの実際 |
| 12. 住浜 (理科・物理) | 栽培・飼育・理科遊びの実際 |
| 13. 辻 (美術・図工)  | 生活科における造形体験活動 |
| 14. 内海 (理科・化学) | 栽培・飼育・理科遊びの実際 |
| 15. 内海 (理科・化学) | 栽培・飼育・理科遊びの実際 |

※平成29年度は第3～5回を中村と須山のTTで実施した。

平成29年度 「生活科教育法」 (3年生) 前期 月曜日 1・2時限 3年生 (260名程) 必修

- |                  |                          |
|------------------|--------------------------|
| 1. 須本 (社会・現代社会)  | 生活科の経緯と特性                |
| 2. 須本 (社会・現代社会)  | 目的, 目標論, 学習指導要領          |
| 3. 須本 (社会・現代社会)  | 生活科の指導論 気づきの質の高まりと有能感    |
| 4. 須本 (社会・現代社会)  | 社会科の学習論 トトロに見られる生活科観と指導感 |
| 5. 非常勤講師・大学教員    | 社会認識の発達と生活科              |
| 6. 非常勤講師・大学教員    | 社会認識の発達と生活科              |
| 7. 非常勤講師・大学教員    | 生活科の授業の実際                |
| 8. 非常勤講師・大学教員    | 生活科の授業の実際                |
| 9. 今村 (家政・育児)    | スタートカリキュラム 幼保の連携         |
| 10. 非常勤・小学校長 1   | 生活科の授業の実際                |
| 11. 非常勤・小学校長 1   | 生活科の授業の実際                |
| 12. 非常勤・小学校長 2   | 生活科の授業の実際                |
| 13. 非常勤・小学校長 2   | 生活科の授業の実際                |
| 14. 須本 (社会・現代社会) | 気づきの発達と生活科               |
| 15. 辻 (美術・図工)    | まとめ 生活科の留意点と課題           |

現在のところ、社会・理科・図工・家庭の各教科の教員が、それぞれの専門の授業の時間帯と重複しないようにすることに配慮している。また、生活科を専門とする研究者や教育現場の教員を非常勤講師として位置付けることによって、生活科の実践的指導力を育成するようにしている。複数の教員によるオブニバス形式の授業は、いろいろな立場や視点からの講義を聞くことができるという利点がある。とくに、教育実習前の学生にとって、授業実践をふまえた教育現場の教員による講義は、子どもたちの実態や教材の展開を知るために役立つはずである。ただし、担当者相互の協議を十分にもつことができていない場合もあるので、それぞれの授業のつながりについては、検討の余地がある。たとえば、似た内容を重複して伝える一方、ポイントになる内容が希薄になるということもある。本稿のような機会を活用して、相互理解を深め、授業デザインの改善につなげていくようにしたい。

#### 4. 生活科における実践内容 —季節感を絵やイラストで表現する—

小学校教科・生活では、小学校の生活科の内容に適した教材を取り上げ、体験的に学習することになっている。学習者は、身近な生活を振り返り、季節・周りの人・地域の出来事などを意識する。大学の小学校教科・生活授業の教材の一つとして、春・夏・秋・冬のそれぞれの季節の特徴を、絵やイラストとしての映像イメージで表現する試みを行った。

「～といえば～」という設定で、左には、春・夏・秋・冬から印象の深い季節を選ぶ。そして、右には、それぞれの季節から思い出される言葉（言語イメージ）を並べるようにする。春・夏・秋・冬といった各季節から想起されるものを言葉として列記して、随時、言葉として示されたものを、絵やイラスト（映像イメージ）として表現することになる。言葉だけでは、抽象的なイメージしかつかめず、絵やイラストといった映像的なイメージと結び付けて、知識の理解や他者への伝達が可能になる。春・夏・秋・冬から学生たちは何を想起したのかをあげることにする。

- 春—桜, つくし, 入学式, タンポポ, 竹の子, だんご, しろつめ草…。
- 夏—花火, ひまわり, スイカ, 海, アイスクリーム, 入道雲, かき氷…。
- 秋—紅葉, 落ち葉, さんま, 読書, 松茸, 栗, 焼き芋, 運動会…。
- 冬—雪, 雪だるま, こたつ, ストーブ, みかん, クリスマス, ケーキ…。

季節に関連した言葉を並べることは、大学生にとって、比較的容易にできる。それに対して、言葉を絵やイラストで示す段階では、戸惑っている姿が見受けられた。ある言葉を取り上げても、その言葉が示す場面・様子を描くのは、難しいことがわかった。具体的な場面や様子が思い浮かばない、普段絵やイラストを描く機会がほとんどない、といった状況がある。

学部2年生が対象の生活科は、130名程の2クラスになっている。一つのクラスでは、絵やイラストをもとに紙版画にした。もう一つのクラスでは、絵やイラストをカラーペンで描き、ラミネーターで加工して作品として仕上げた。

今回の版画は、従来の生活版画ほど生活をリアルに見つめたものではないが、季節感や地域性を絵や版として表現するようにした。紙版画にするためには、まず図案を考える。そして、厚紙を切り取って台紙に貼り、高さの違いによって図案を表現する。さらに、ローラーでインクをつけては版画和紙に刷ることになる。ハサミやカッターナイフで厚紙を切り取る・ボンドで貼り重ねるといった活動が、生活科に加えて工作的な内容を含むので学習としては充実しているが、刷りにいたるまでには時間的に大変である。説明から版づくりで1コマ、版の完成から刷りや鑑賞で1コマの時間が求められる。



図1 紙版画「夏といえば～」



図2 紙版画「冬といえば～」

一方、カラーペンで彩色し、ラミネーターを通して作品化する場合は、紙版画と比べると、版づくりと刷りの手間や時間を省くことができるが、季節や地域に関係する絵やイラストを次々に描いて楽しむといった点で魅力的である。表現された季節感を比較する、選択されたモチーフを並べて鑑賞する、といった鑑賞活動を通して、学生の季節感や生活感覚の読み取りが可能である。

春といえば～、夏といえば～といった問いかけについて、まずいくつかの明確な言葉と結び付くことが



求められる。そして、その言葉をイラストや絵として表現できれば本課題の目標は達成される。その映像イメージがすぐに検索画面に出てくるようなもの。よく見かけるものよりは、絵やイラストの組み合わせ方が工夫してある、モチーフや描き方に生活の実感や個性が感じられるものであればよい。

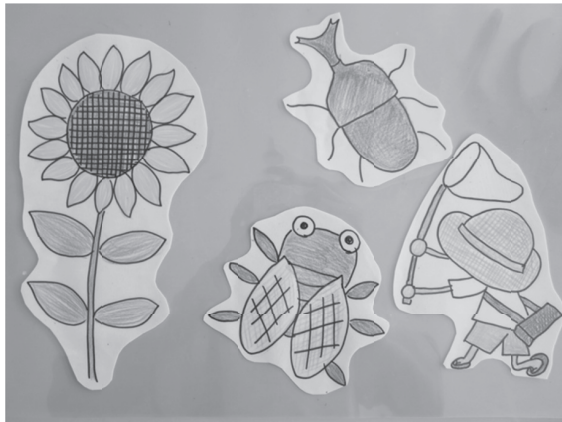


図3. イラスト「夏といえば〜」

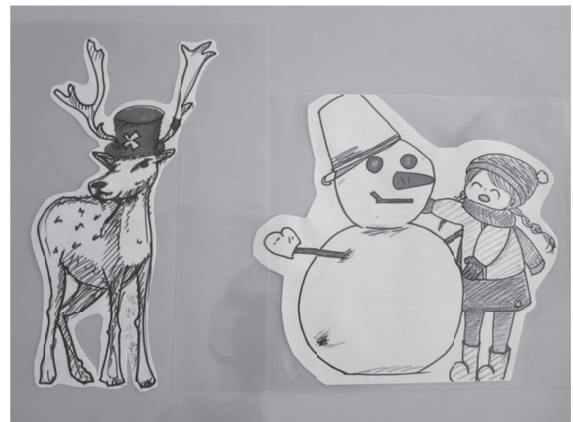


図4. イラスト「冬といえば〜」

小学校での実践を想定した場合には、描く方の優劣に視点をむけるのではなく、率直に表現された内容、お話をしよう身近なものを描く姿勢に着目するようにしたい。ただし、この課題は、教員養成学部における実践であり、小学校1・2年生が同様の描写力をもつとはいえない。むしろ、描き方においては、この時期特有の描き方をするにちがいない。

春夏秋冬の季節に加えて、岐阜・高山・名古屋など身近な土地を選ぶことができる。各地域には、風土性や特徴があるはずである。季節と同様に絵やイラストとして視覚的に表現する試みを行う。(辻)



図5. 「岐阜といえば〜」

## 5. 生活科における実践内容 **—物理学分野・生物学分野—**

本講義のうち物理学および生物学の分野に関する内容として、中村（理科教育講座（物理））と須山（理科教育講座（生物））が3回の講義を担当した。

この3回の講義では、1) 大学において100名を越えるような大規模クラスにおいても「理科の実験」を交えて、講義をより効果的に実施できる授業スタイルの探索、そして、2) 複数教科が融合した内容であるという生活科の特性を活かすための、教科分野別ではなく「学生に体得して欲しい能力」に的を絞った講義内容の構築を目的として、理科の中でも教科分野の異なる2名の教員が協働して行うチーム・ティーチング（TT：team teaching）形式での授業を、3回にわたり連続して実践した。3回をとおして、授業者の一方的な授業ではなく、学習者の主体的、対話的な学びを促進するよう配慮した。

ここではこの3回の授業の概要をまとめ、成果の報告および今後の課題を検討する。



授業の最後の15分間に、周囲の学習者同士で互いの設計を発表し、聞き手が発表者の内容にアドバイスや感想等を含めて評価する。発表者は聞き手からのアドバイスの内容もワークシートに記録する。

(2) 2時間目

①講話：中央教育審議会の答申で指摘されている生活の課題を解説する。

②体験・活動：水をテーマにした実践を60分間で実施する。

板倉らによる仮説実験授業(板倉, 1974)では、「授業書」と呼ぶ授業案、教科書、およびノート兼用の印刷物をもとにして、授業を実施するもので、多様な実践がなされ、成果が報告されている(板倉, 2010など)。これらの授業書は科学の課題について、いくつものステップが用意されており、科学的思考を段階的に積み上げていくように構成されている。

本実践では、犬塚(1983)の授業記録を参考にして、身近な存在である「水」をテーマにした授業を展開した(図7)。大学生対象であることと、60分ですべてを終えるようにすること、100名を超える人数が一度に受講することから、授業書は用意せず、スクリーンに投影する図と説明文を読みながら一斉に行った。

表1に示すように、この授業は細かなステップからなっている。授業者が課題内容を読み上げながら、各作業時間を区切ることで、全員の進度を合わせた。このようにすることで、実験を通じて授業者と学習者との双方向の交流を生みだし、大人数でも授業はおおいに盛り上がる結果となった。また、表1に示すように、学習者はペアの学習者と議論を繰り返す。一方が発話するときには他方は必ず聞き役になり、双方向の対話が成立する。互いの予想をぶつけ合う議論が収束したところで、一人ずつ実験し結果を確認し、またペアによる議論に戻る。本授業のデザインはこのように、学習者一人ひとりが自ら思考し、手を動かして予想を検証する活動を重要視している。



図7. 水をテーマにした実験授業の様子

表1. 授業の流れ

1	解説	アルキメデスの考えた水面について解説する。
2	予想	アルキメデスが水面をまるく書いた理由を考える。
3	解説	地球がまるいという考えを解説する。
4	観察	ガラスのコップに注いだ水の水面の観察、表面張力に着目して再観察。
5	予想	ガラスのコップとプラスチックのコップで表面張力の大きさを予想。
6	交流	学習者の予想、考えの根拠を周囲の学習者で話し合う。全体で意見を取り上げて交流し、予想の内容別に人数を数える。
7	実験	個人で実験し結果を観察する。わかったことを記述する。
8	解説	表面張力、水とガラスの親和性に着目して解説。メスシリンダーの例を示し、毛細管現象とともに説明する。
9	課題	コップに入れた水は山盛りにできるのか、問題を提示し予想させる。
10	予想	学習者個人の予想と、根拠を記述する。
11	交流	学習者の予想を共有する。
12	解説	水の表面にできる膜の存在を解説する。
13	実験	議論が煮詰まってから、学習者個人が実験して確認する。結果を記述する。
14	解説	実験で使用した水を用いた簡単な事象を提示し、水の表面にできる膜の存在に触れながら表面張力について解説する。
15	予想	満杯に入った水の表面を破るとどうなるか、予想する。
16	交流	学習者の予想を交流する。
17	実験	学習者個人で実験し確認する。
18	課題	水をどこまで山盛りにできるか、1円玉を水中に沈めることで定量化する方法を提示し、予想させる。
19	交流	予想の結果を1円玉の枚数でグループ分けし黒板に記述する。
20	実験	学習者個人で実験し確認する。結果を全体で確認する。
21	課題	1円玉は水に浮くのか、水の膜に触れながら課題を提示する。



22	予想	学習者個人で予想する。
23	実験	学習者個人で実験し確認する。
24	解説	結果を交流するとともに浮力について解説する。
25	課題	2つの1円玉を水に浮かべるとどうなるか、課題を提示する。
26	予想	近づく、離れる、両方または一方が沈む、の中から個人で予想する。
27	実験	個人で実験し確認する。
28	解説	結果を解説するとともに、池の水面に浮かぶゴミの例を示してまとめる。
29	課題	3個の1円玉を浮かべた場合の課題を提示する。
30	予想	個人で結果を予想する。
31	実験	個人で実験し確認する。
32	課題	さらに1円玉を増やした場合はどうなるか、課題を提示する。
33	予想	個人で予想させ、規則性を考えさせる。
34	交流	予想を交流するとともに、解説する。
35	省察	授業をまとめ、活動を振り返る。

(3) 3時間目

- ①活動：自分が子供の頃に行ったことのある「草花遊び」を思い出して、体験学習シートへ記入する。また、この時間に講義室の外へ出て、近隣の草地や庭部分で実際にできると予想される草花遊びを列挙する。
- ②体験：野外へ出て、30分の間、草花遊びを行う。最初は学生が自発的に遊ぶのに任せ、後半は折を見て教員が様々な遊びを紹介し、また、自然にできた小グループ間での情報交流を促した(図8)。講義室へ戻った後、予想した草花遊びについて、実際には出来なかった遊びの種類とその理由を考察してシートへ記入する。
- ③講話：1時間目に解説した生活科指導要領を再度確認しながら、生活の授業では「具体的な活動や体験」が重視されていること、また、遊びの中でも児童に「みつける・くらべる・たとえる」といった多様な活動を充実させるためには、教師自らも豊富な体験が必要であることなどを解説した。また、体験学習シートには学習者が育った周辺の自然環境を評価できる設問(表2)を設け、学習者の幼少期の自然環境と、草花遊び体験量との関連性を考察した。



図8. 野外での草花遊びの様子

表2. 本講義で使用した「草花遊び体験学習シート」設問の一部

【I】自分が育った環境(自宅の周り)には、どんな自然がありましたか?→自然度得点  
 ※途中で引っ越しをした人は、幼稚園~小学校低学年頃に一番長く住んだ場所の様子で回答

項目番号	環	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
境項目		池や沼	小さな川	大きな河川	野原	雑木林	果樹園	畑	水田	山間地	海辺	公園	住宅地	商店街	工業団地
合致度合い															
とてもあてはまる	4点	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
ややあてはまる	3点	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
あまりあてはまらない	2点	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
まったくあてはまらない	1点	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
項目1-10の得点合計(A)												得点(B)	項目12-14の得点合計(C)		



④活動：個人で思考する活動として、1時間目に設計した生活の授業を振り返り、改善を行う。記述する項目は第1回目と同様とし、同じ1枚のワークシートの左半分に第1回目の記述欄、右半分が3回の授業を経ての記述欄としてある。さらに、学習者が自己の変容をメタ認知できるように、第1回目の記述内容と第3回目の記述内容の変容を振り返って、なぜ自分の考えが変わったのかを記述させた。

## 5-2 本講義に対する学習者の評価

講義の最後に、学習者に全3回の内容に対しての感想を、記名したワークシートの所定欄へ自由に記入させた。文章で回答された感想の内容を件数毎に整理したところ、全回答は346件、そのうち肯定的な内容が316件(全体の91.3%)、否定的な内容が30件(8.7%)であった。その一部は次の通りである。

### 肯定的回答(上位15件)

- ・野外での実習が楽しかった(63件)
- ・生活科の目的や内容を把握できた(33件)
- ・実際に手を動かすのは楽しい(25件)
- ・生活科の内容を思い出すことができた(25件)
- ・授業が楽しかった(22件)
- ・授業計画を立てるのは難しいと思った(17件)
- ・教師になった時に活かそうと思った(14件)
- ・野外での実習は子供の視点に立つことができる(13件)
- ・子供に興味を持たせる大切さがわかった(12件)
- ・自然に触れることは子供たちにとって大切だとわかった(12件)
- ・実験が楽しかった(11件)
- ・実験や経験を踏まえて考えることができた(11件)
- ・授業計画を立てる経験ができてよかった(9件)
- ・体験することが多く、わかりやすい授業だった(9件)
- ・野外での実習や実験は新鮮だった(9件)

### 否定的回答(上位5件)

- ・実験の準備が大変だった(6件)
- ・スライドの切り替えが早い(4件)
- ・ワークシートを書く時間が足りない(2件)
- ・花粉症なので野外での実習が辛かった(2件)
- ・机が斜めになっていて水の実験がしづらい(2件)

## 5-3 本実践における成果と今後の課題

授業感想のなかで肯定的な回答は、楽しく行うことができた、実験および体験活動の重要性を感じた、自らの学びの達成に満足できた、といった内容のものであり、これらが回答件数の約9割という多数を占めた。本講義は、大学における大規模クラスでの授業という条件においても、TT形式をとることで、「理科の実験と体験活動」を比較的スムーズに授業へ取り入れることができたため、生活の授業としての学びを学習者へ十分に感じさせる授業展開であったと考える。一方で、否定的な回答の内容は、授業の進行に関するもの、実験や野外活動の条件に関するものが大半であった。大いにこれらの意見を取り入れて、今後の授業展開を改善していきたい。

また、授業者が意図した、教科分野別ではなく「学生に体得して欲しい能力」に的を絞った講義内容の構築、および低学年理科へ接続する授業としての評価については、今後、学習者の受講成果物であるワークシートの総

合的な分析を行ったうえで、改めて報告したい。(中村・須山)

## 6 まとめ

生活科では、子どもが五感を働かせながら、生活体験をする。その試行錯誤の体験を通して、様々なことを発見する。大人が知識や技能を教え込もうとする教育観とは異なる。学生たちは、子ども中心の教育観が大切であると思いつつも、知識や技能を丁寧に教えることに引き付けられるようである。たとえば、学生が授業参観をする機会に感想を聞くと、学生がよいと感じた授業は、教師の話を中心に聞くことができた授業であることが多い。学生は中学校から高等学校にかけて、いわゆる受験勉強の方法に慣れている。教師の話やテキストを熟読して知識を覚えることが学習であるという意識をもっている。子どもたちが体験を通して気づくことから学びが始まるという考え方には、実際には馴染んでいないように見受けられる。

学生が生活科の内容を理解する手立てとして、たとえば、小学校生活科の教科書を見て考察する、模擬授業等を通して教材研究をする、授業見学やビデオ記録によって教育現場で行われている授業を理解することが想定される。いずれも有効な手立てであるが、さらに、子どもの活動の様子を子どもたちとの触れ合い交流を通して理解することが望まれる。また、学生はしばしば学習指導要領の文面やテキストの記述を引用する。けれども、生活科についての自身の考えを述べる、教材を工夫するという段階にはいたっていない。模倣や引用から自己の生活科の実践を創造する姿勢を持ってほしいと考える。本年度の生活科の授業において、キャンパス内の芝生広場において、生活科に関する遊び体験をする、自然を見つめるといった活動が取り入れられており、学生の意欲的な姿が見られたことは、成果であった。次の機会には、学習指導要領、教科書等のかかわりから教員養成としての授業内容について報告したい。(辻)

## 注

- 1) たとえば学生や教員の人数が多い愛知教育大学には、生活科教育の講座があり、専任の教員が所属している。
- 2) 板倉聖宣, 仮説実験授業 授業書〈ばねと力〉によるその具体化, 仮説社, 1974.
- 3) 板倉聖宣, 仮説実験授業をはじめよう, 犬塚清和, 授業書〈水の表面〉授業記録, 仮説社, 2010.
- 4) 堀哲夫, 教育評価の本質を問う一枚ポートフォリオ評価OPPA, 東洋館出版社, 2013.
- 5) 佐藤隆弘・ランブレヒト マティアス・大澤力, 幼少における自然体験を重視した環境教育とESDの推進に関する考察. 生物教育 54(1), 2013, pp. 16-26.

## 謝辞

「小学校教科・生活」および「生活科教育法」の授業では、担当した教員や受講した学生の皆さまにお世話になりました。また、物理学教員・生物学教員の分担講義において、各回の授業で使用する大量のワークシート類の整理、および一部データの解析に、教育学部教務補佐員の中村理之さんのご助力を得たことを、ここに記して感謝します。